



南大阪平人・沖縄現地学習会報告

沖縄闘争に連帯し基地もオスプレイも撤去しよう！

S支部
M・K

六月八日～

〇日、南大阪平

和人権連帯会議

による沖縄現地

学習会に、昌一

金属支部から二名、全員
で十四名の団で行ってき
ました。

伊丹空港からちょうど

二時間のフライトで、沖

縄の地を初めて踏みまし

た。

雨と言われていました

が、曇りで時間が経つに

つれて晴れ、初日は一歩

空港の外に出れば湿度七

〇%～八〇%の世界で、

例えればサウナに入った

瞬間のようです。

沖縄バスの川端さんの

ガイドで、沖縄の島の特

徴や歴史を話していただ

き、昼食の場所に到着し、

島の名物に舌鼓。

まず最初に系数壕跡か

ら見学。自然洞窟（壕・

ガマ）は沖縄という島が

サンゴ礁が隆起してでき

た島であるため、そうし

た自然洞窟が多くあるの

です。質問をしました。

「人工的に造られた洞窟

はあるんですか」と。あ

るそうです。それは日本

軍の司令部が利用してい

たそうです。

全長二七〇mの洞窟は、

系数地区の避難場所とし

たが、戦況が悪化するに

つれ、軍の倉庫から野戦

病院へと利用されていき

ました。中では、死体や

破傷風患者など重症者、

便所や食事のカマド、自

決する人、十分な換気も

ない所で、異臭がすごい

環境の中で生活をし、カ

マドの火も一日二回、煙

の影響で一度のご飯もピ

ンボン玉一個の大きさを

口にできる程度でした。

米軍が攻めてきた時は

「撃たないから出てこい」

と言うが、日本軍の教え

から「捕虜になるくらい

なら自決せよ」というこ

とで命を絶った方も多く、

火炎放射を出入り口から

中へ米軍が放ち、焼け死

んだ方もいるそうです。

自然洞窟はまだたくさ

んあったのですが、米軍

が爆破し、一九九七年の

琉球新報で、発掘された洞窟から生き埋めになった人骨も見つかり、その状態はくつろいでいたままの形になっていたそうです。

平和の礎では、沖縄で亡くなられた数多くの名前が刻まれています。

一日目、最後に「ひめゆりの塔」に向かいました。沖縄師範学校女子部の高等女学校ひめゆり、と呼ばれ、戦争が長引き、品のある学園から、次第に軍事化され戦場へ動員されていきました。米軍の激しい砲爆撃により解散命令で逃げまどい、自決や砲弾・ガス弾で多くの命が失われました。



二日目は、米軍基地を中心に、普天間基地のオスプレイ、嘉手納基地の戦闘機を見学し、話題のオスプレイを嘉数高地から見る事ができました。年内にまたアメリカから十二機やってくるそうです。

憲法九条の碑は沖縄のどこの役場前にもあるのに、本土の市役所などに

は無いことに、地元の方は呆れていました。

二日目の最後は「対馬丸記念館」です。一九四五年四月一日に、子ども達が集団疎開で長崎に向かう途中、米潜水艦の魚雷攻撃により沈められてしまします。日本海軍二隻の護衛にて三隻の疎開船、計五隻で移動中、魚雷により沈没しても残りの船は助けに行かず、これ以上犠牲者を出してはいけないということで、そのまま長崎へ向かったそうです。

質問しました。「対馬丸は大砲も積んでいないし、潜水艦なら潜望鏡で分かるのに、なぜ攻撃し

たのですか」と。対馬丸はもともと軍の貨物船で、上方が黒いため護衛の軍艦と同じように思われたようです。

三日目、辺野古と北部米軍基地に向かうサーピスエリアで休憩中、上空にF・18戦闘機が飛んでいるのを見ました。

最後に沖縄バス本社にて琉球朝日放送によるオスプレイ反対運動のビデオを一時間ほど見ました。

普天間基地の車両出入口で座り込みや自動車のエンジンを切り、暑い中で窓も締め、バリケードしていました。強制撤去にも耐えていましたが、強引に排除される様子も

ありました。沖縄の方は手を出しません。沖縄民謡で対抗していました。中には泣きながら歌っていたのが印象に残りました。

平和ガイドで同行していた本村さんは「沖縄戦の真実を知ってください。だから沖縄に来て学んでください。それを伝えてください。運動もしてください。我々沖縄県民が黙っていたら、また戦争が繰り返されます。四一年前に戻るんですか？六年前に戻るんですか？皆さんが見学して見たこと、感じたこと、これが戦争なんです。小さな命、様々な方の命が亡く

なることなんです」と話されていました。

ビデオの中で、元米軍海兵隊員が「沖縄はアメリカの占領地であり、日本人が反対運動をするのは間違っている」と言います。しかし、沖縄の方は座り込みで、デモで勝ち取った闘いもあったそうです。これからも闘い続けると言っていました。私は戦争の経験はもちろんありませんが、日本で唯一の地上戦だった沖縄戦の真実を知り、衝撃を受けました。

私の母も広島島の呉から少し行った島にいて、原爆投下の時、難を逃れたと言い、投下周辺の川は

悲惨な光景と言っていました。戦争は絶対繰り返してはいけないと思いましたが。今回、沖縄で学んだことは大きかったです。また機会があれば行ってみたい。交流会ではいろんな方々と話し、笑い、共感しあい、とても充実しました。沖縄の文化、民謡や島唄などを、見て聞いて、踊り感じることで親近感が湧きました。全港湾・全日建・大阪市職の方々、ありがとうございました。



S支部
A・Y

六月八日早朝に伊丹空港に集合し、九時一〇分発の便で沖縄に向かいました。

二時間程で沖縄に到着し、そのまま那覇シヨッピングセンター内で昼食。

最初に向かったのは糸数アプチラガマでした。戦前、避難所や野戦病院として使用された鍾乳洞らしく、当時の満足に明かりを確保出来なかった状況を体験する為、懐中電灯を持ち念のためにヘルメットを借りて中に入りました。暗いうえに足元も悪く、足元に注意しすぎ何度か低い天井に頭をぶつけてしまうよう

な内部が、銃弾が飛び交う外よりも安全だと避難していた方々に安心感を与えていたそうです。破傷風で菌が脳に回り正気を失ってしまった脳症患者を隔離した場所や、外からの火炎放射で黒い煤が今も残る場所、爆発の衝撃で天井に張り付いたままの一斗缶などを見て回りました。

次に韓国人慰霊塔へ。ここは沖繩に連れてこられた亡くなった韓国の方々の為の慰霊塔です。

の方に、連れてこられた朝鮮の方、米兵の方の名前も刻まれていました。次に、ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館へ行きました。資料館の中には、元々はただの女学校の生徒だったひめゆりが、どういう風に戦争へと巻き込まれていったかを説明した年表や、野戦病院としてのひどい状況の証言などがありました。一番多かった仕事は危険な壕の外へ出て、砲弾で出来た穴などに遺体を埋葬することだったそうです。

一日目の最後に魂魄の塔で黙祷し、その後、あの海岸へ行きました。ひめゆりや逃げ惑う人達が追い詰められた海岸で、当時の事情を知る地元の方は近づくこともないとの事です。六月九日、最初に向かったのは嘉数高地です。ここからは普天間基地を遠目に見ることが出来ます。途中で資料として保存された弾痕の塀や陣地壕跡に寄りました。物見台で基地を見ながら説明を受け、バスへ戻る途中、京都出身の方の慰霊碑で黙祷し、トーチカ跡を見学しました。

次の場所は予定には無かったのですが、沖繩国際大学へ行きました。ここには以前に米軍のヘリコプターが墜落したそうです。樹は焼け焦げ、校舎の壁にはヘリの羽で傷が刻まれ、爆風で飛んだ部品の一部がマンシヨンの壁を突き抜けて寝ている赤ん坊の直ぐ上を通過し、周囲には燃料の悪臭が漂っていたそうです。大学はこれに対し抗議しましたが、補助金で校舎



を新築するという政府の提案を呑み、抗議を鎮静化しました。この補助金は日本の税金だそうです。その際、焼けた樹・傷の付いた壁共に撤去されうになったのですが、それに反対の声が上がリ、樹はそのまま、校舎は一部が残されました。

次に道の駅「嘉手納」のテラスで、沖縄の基地状況について説明を受け、沖縄の土地の何倍もの面積が基地の空域になっていること、沖縄から行き来する飛行機などがその空域の間を縫うように進まなければいけないことを知りました。同施設内の展示室を見学、戦闘機

の騒音や戦前の沖縄についての資料がありました。そこにあるレストランで昼食をとり、次の場所である読谷村役場へ。役場内には堂々とオスプレイ反対の看板が掲げられ、憲法九条の碑が建てられました。以前にその碑は心無い誰かに打ち壊されたようですが、もう一度建てられました。

チビチリガマ・平和の像



次にチビチリガマへ。集団自決が起きた場所です。前には中に入れたそうですが、今は立ち入りが禁止されています。理由は、指などの未だ回収されきつてない遺骨を踏み潰されるのは我慢できない、という遺族からの抗議です。自分達もガマ入口に建立された平和の像で黙祷し戻りました。

次の場所も予定に無い、金城さんという反戦の彫刻家のアトリエに。そこはご友人の土地を借りているのだそうで、本来は百メートルの反戦シリーズが折りたたまれて鎮座していました。

二日目の最後は対馬丸

記念館です。対馬丸は学童疎開船で、長崎に向かう途中に米軍の潜水艦の魚雷を受けて沈没し、多くの犠牲者を出しました。

近年になり対馬丸は発見されたのですが、引き上げには多大な労力がかかるとし、その代わりとして政府はこの記念館を造ったそうです。資料の中で印象に残ったのは、対馬丸から脱出し長い間漂流した生存者の証言でした。

少ないイカダを競う様子がみつき、命からがら這い上った子供に、大の男が「お前あとから上ってきたらどう。」と殴り、隣にいた人がいつの間にかいなくなっていたり等

辺野古・命を守る会



です。

最終日の六月一〇日、最初の目的地は辺野古基地建設予定地で座り込みをされている、「命を守る会」のテント村です。

当日で座り込み三三四〇日目だそうです、一〇年近くもの間挫折することなく続けるのは、基地建設に対してとても強い危機感を持っていなければ出来

ないと思います。海岸線を隔てる基地のフェンスには基地反対の旗が結び付けられていました。本来はリボンもたくさん結んでいたそうですが、前日の九日に基地賛成派がツアーを組んで東京から来て、リボンを取ってしまっただけです。

次に北部米軍基地「キャンプハンセン」へ。フェンス越しに中を見ていると、丁度米兵（おそらく新兵）の訓練が見えました。弾は込めていないだろうとの事でしたが、それでも銃を持った人間が直ぐ近くにいるというのは怖く思います。

最後は沖縄ツーリスト

の会議室を借りてビデオ鑑賞をしました。ビデオは二本、内容はオスプレイ反対についてでした。軍の、それもオスプレイのヘリパッドを自分達の家を取り囲むように造られそうであれば誰でも嫌だと思えます。それに対して座り込みを行った住民の個人を狙い、国は裁判を起こしました。これはSLAPP裁判（スラック）と呼ばれる、力ある団体が声を上げた個人を訴える弾圧・恫喝目的の裁判で、アメリカでは州によっては禁止されています。他にも座り込みを同じ沖縄県民である警察官が排除する様子等が映

されました。これを見ていた時、ガイドの方が言った「沖縄は未だ植民地」という言葉を思い出しました。ああ、こういう事かと。鑑賞後、バスで那覇空港へ移動し、伊丹空港へと戻りました。

平和ガイドの方がこう言われました。「あなたが今回学んだ事を自分達だけで終わらせないでください。伝えたいと思ったら、ぜひお子さんやお孫さんを連れて来てください。話を聞くだけではわかりません。自分の目で見ないと」。忘れないように続ける事が大事なのだと思います。